

ある日——行為の意味の理解はいかにして可能かを考える

津守 真

一

子どもが遊ぶとき、その子どもの本来の姿——本質——があらわれることは、どの子どもにも同じである。

昨年から歩くようになった五才のA子は、最近、ボールで遊ぶ。私はしばしばA子とつきあう。保育室の小さな空間が、自分の仕事場でもあるかのように、その中でボールを追いかけるA子をみていると、人間にとってたいせつなことをここで学んでいるように思える。

二

朝、A子は保育室にはいると、まっすぐにはって、ついたての向う側にあるボールの箱にゆき、小さなボールをいくつも出す。そのボールをかかえるようにし、ころがると追いかけてつかまえようとする。私をみると、アーと云ってボールを差し出し、手を放す。ボールは私の方にくる。何回かくり返すと、私に床にねるように指示し、私が横になると、顔をつけて耳をよせる。私はAちゃんと呼ぶ。何回かやると、私を残し、またボールを渡し、手放し、ころがると追いかける。

私がA子の手をとって立ち上ると、A子も立ち上り、ボールを2個手にもったまま、覚束ない足どりで歩く。私は後向きに、A子の手をひいて、庭の方まで歩いてゆく。ボールを落とすとA子は立ち止り、拾い、または拾わせてからまた歩く。こうして歩きつづける。そのボールを床の上で手放してころがす。向うにころがるボールを、はってとりにゆき抱きかかえる。それをくり返す。

A子にとって、ボールは私の見るボールとは異り、だいたいな珠である。布のボールは口にもくわえるから、ボールはA子自身の一部でもある。そのボールを、自分の意志で四周に散らす。手を放れるころがっても、ボールはA子にとって存在しつづける。追いかけて、再び手の中にいれようとする。アーという他の人がころがしてくれて、ボールを呼びよせることもできる。

私はA子と毎日一緒に過しているから、生活の別の側面のことも思い浮ぶ。

食卓で、A子は、たべものをあたりに散らしながら食べていたが、このごろはおぼんの

中でたべる。かこまれた空間に物を集める。籠を差し出すと、手にもったボールをその中にいれることもある。かこみの内部の空間が意味をもち始めている。

これまで、A子は食物でも物でも、外に散らしていた。境界があることがいやで、境界をこえて、見えない手のとどかないところにまで散らしていた。ピアノをひいても、メロディをひくのはいやで、上と下の音階をはしまで音をひろげさせた。自分をとりかこむ四周は、温い光がさしてひろがり、自分はその中心に坐しているかのように思えた。

いま、A子は、ボールを手放しても、それは失われるのではなく、自分の範囲に属することがわかり始めている。ころがるボールを追いかけて、再び手にする。そしてまた手放し、それを自分のものにするのできるのをためしている。二週間前までは、ボールをもった手を上げて私に差し伸べるが、手放すことができなかつたのである。

赤、黄、白、緑、色とりどりのボールが、四方に散ってころがるのを追いかけるA子の相手をしていると、あきることなく、いろいろの思いが私の心にも往来する。だいたいボールを手放してもそれは存続しつづけることはわかっているのだが、それは自分の手のとどかないところに去ってしまう危機をも常にはらんでいる。それでもなお、A子は手放す。私にも同様の体験がいくつもあることを思う。娘を結婚させ、独立させたときにも似たような体験をした。きのうは、この四月に卒業させた子どもの母親が来た。公立養護学校の中等部にいったその子どもは、毎日のしみに学校に出てゆくという。愛する者をつまでも自分の手もとにとどめておこうとする心はだれにでもあるのだろう。しかし、そ

れを手放して独立させるのが対等な人間同士の関係ではないかと思う。外の世界は私の思うようにはならないし、危険もあるから、手放すのには時を要するし、慎重でなければならぬ。だが、外の世界も、人間の真実——神と云ってもよい——がはたらく場所である。ヒューマニティ——深い意味での人間性は、個人の境界をこえて存在するのであり、その意味で普遍的である。そのことを信じられるとき、手放す覚悟がなされる。

A子が手放したボールは、再びつかまえられるものもあるし、見えないところへ去ってゆくものもある。A子はあるところで消え去ったボールを断念する。自分の範囲から去ってゆくものに対して、それ自ら存続して生きる力と、外の世界の庇護を信頼して委ねている心との両方が潜んでいるように思われる。



幼児期の体験と大人の精神との間には、無数のできごとや体験があるから、直結させて考えることはできない。しかし、この幼時期の体験の基礎の上に、大人の精神は形成される。これをうめてゆく作業は、興味深い研究課題である。

三

子どもがボールで遊ぶ相手をしながら、その世界を共にし、いろいろと考えをめぐらすことは保育者のたのしみであるのだが、他人である子どもの行為について、大人が自身の体験から類推し、子どもにひきうつして考えることがどうして許されるのだろうか。

もう一度重複をおそれずに前に述べたボールの遊びの場面を分解して考えてみる。

これは「ボール遊び」とひとまとめにして考えることはできない。すでにのべたように、多くの内容がふくまれている。(1) A子が「ボールを追いかけてつかまえようとす」というのは、正確に言えば、A子がそうするのを私が見ているのである。私がボールを追いかけているのではない。私はいつでもA子に応答できるように備えながら、傍で見ている。すなわちA子の行動を客観的にだけ見ているのではなく、私も同様の行為をするならば発見するであろう意味をそこに読みとっている。自分が子どもの位置になって行為する可能性を前提として、子どもと私とは同時に同じ場面にいる。(2) 私がA子と連動して身体を動かすことによって、A子の行為に参与している。ボールをめぐって、ひとつの行為が両側から違った立場で同時になされており、ここでも両者は位置を交換する可能性

をもつ。だから相互に調節し合い連動して動くことができるのである。

歩行の最中にボールが落ちたとき、ボールのたいせつさが私にわかるから、私は立止って拾う。そうでなければ立止らずに通り過ぎるだろう。A子の歩行と同じ位に困難な状況にある場合を大人の側に想像するときには、何としても拾ってやりたいと思う。大人が自身の状況に転換させて想像することは、勝手な解釈どころか、子どもと連動した行為の中で必然的に生じる人間的知性であり、保育の実践を助ける。

A子がボールで遊んでいるのは、いわゆる「ボールで遊んでいる」のではない。たいせつなもの、保持し、手放し、追いかけて、再び手にとる行為をくり返しているのである。失われる危険をおかしても手放すことを試みている。もっと他の言い方を見つけて、A子ができるかもしれない。いずれにせよ、それはあとから大人が与えたことばであって、A子とはことば以前の行為をしているのである。ことば以前であるが故に、その内容はことば以上に豊富である。単純な言語化では、その行為の数は失われてしまう。

子どもは、身体的行為によって、人生を探究している哲学者である。傍にある大人は、その行為を自分におきかえ、その意味を深めるとき、子どもの内奥の世界に応答する者となる。

日日の保育によってそれは確かめられ、新たな展開をするので、毎日子どもにふれることができるときは妥当性が増す。

(愛育養護学校)